

会 議 記 録

会議名称	第2回社会教育委員の会議
日 時	令和2年9月25日（金）午後3時04分～午後5時16分
場 所	中棟6階 第4会議室（オンライン会議）
出席者	委員 山口、小澤、朝枝、南、檜枝、赤池、天野、内山、笹井 区側 生涯学習担当部長（中央図書館長）、 生涯学習推進課長（中央図書館次長）、 社会教育推進担当係長（社会教育主事）
配付資料	<p><配布資料></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 令和2年度第1回社会教育委員の会議 会議記録（案） 2 東京都生涯学習審議会『「地域と学校の協働」を推進する方策について－建議－』（再送） 3 検討課題について <p><参考資料></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 令和2年度小学生名寄自然体験交流事業 参加児童募集 2 令和2年度 すぎなみ大人塾 方南和泉コース 3 令和2年度 杉並区の図書館※ 4 とうきょうの地域教育 No.140※ <p>（※）＝委員のみの配布</p>
会議次第	<p>I. 報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 会議録の確認について 2 小学生名寄自然体験交流事業について <p>II. 協議事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 検討課題について <ol style="list-style-type: none"> (1) 「地域と学校との協働」とこれからの社会教育について (2) 前回会議の意見から 2 次回について 3 その他

(意見要旨)

- 議長 令和2年度第2回杉並区社会教育委員の会議をオンラインで始めたい。新しく赴任した中央図書館長兼生涯学習担当部長にご挨拶頂く。
(中央図書館長兼生涯学習担当部長挨拶)
- 議長 どうぞよろしくお願い申し上げます。次に資料確認を。
(社会教育推進担当係長(社会教育主事) 説明)
- 議長 では、協議事項の1の一つ目「『地域と学校との協働』を推進する方策について」であるが、私が関わっているので説明させていただく。すでに東京都生涯学習審議会の建議をご覧いただいていると思うが、ここには大事な点が4点ある。
- 子どもと斜めのコミュニケーションを取れる人が重要であるという「子どもとナナメに」がまず一つ。
- 二つ目は、教育に関わって様々な活動をサポートしてくれる人が重要だということ。子どものプライバシーもあり難しい面もあるが、例えば社会科の授業で戦争体験を話してくれる人たちや理科の実験、準備や後片づけを手伝うなど、子どもが育つ教育環境をサポートする人がいると良いこと。
- 三つ目は、先生と保護者の間に立ち、緊張関係を緩和する第三者が重要だということ。
- 四つ目は、社会教育の側から子どもの成長を共有する機能作っていくことが大事だということ。
- 建議の中でも、地域コーディネーターの役割を重要視して書いているが、地域の住民、団体、機関等の関係者や学校の実情と教育方針へ理解があり、地域課題についての問題提起、整理、解決先の構築等を仲間と共に進めることにより、地域学校協働がうまく回る。
- 地域と学校が協働で作業する例として、横浜市の東山田中学校で学校と地域の予定表をカレンダーにまとめたものがある。これにより修学旅行や運動会などの学校行事と地域行事があることをお互いに把握できている。
- 地域学校協働活動は、地域住民の自発的でボランティアな意思によって行うことが中心だ。地域学校協働活動を進める上で不可欠な存在が地域コーディネーションであり、地域のさまざまな団体や機関、人々、住民と一緒に学校機能を高めていくための中核的役割を担うことが地域コーディネーターに期待されている。
- 「アクティブ・シニアの社会参加を促進する」という切り口では、地域学校協働は元気高齢者の社会参加を促進するための場であり、区民同士や区民と子どもたちもつながるといふ場であると書いてある。地域の高齢者が社会参加して人々とながれば、その人自身が元気になることと同時に、地域住民の力量アップが広がる。子ども、学校、先生にとってもプラスであり、長期的な視点だが大切なことだ。
- 以上の説明や建議書について質問があればうかがいたい。
- 委員 学校運営協議会を置いている学校をコミュニティスクール、CSと言うが、私は近隣の小中学校のCSをしている。地域コーディネーションについて、杉並区はある程度実現できていると思う。学校教育に対して地域の教育力を取り込み、子どもの教育をより社会に広げた形でやろうとしている。先々、学校が社会にいろんなものを提供することになるのかと

思う。

- 議長 東山田中学校もCSであるが、ボランティアを募集し、その中からコーディネーターになり、子どもたちの教育に役割を果たしてきている。それが地域学校協働本部「やまたろう本部」を運営している。子どもたちや地域の人たちにシンボルマークを公募し、協働作業の経験を通して、このシンボルマークを作ったり、子どもたちや地域の人が手作りで作ったエコバッグやクリアファイル、全部「やまたろう」のマークをつけて販売し、地域学校協働本部の運営資金にしている。こうした運営をしていくことで企業経営のように継続的な形で活動できるような地域づくりが大切だ。

学校、地域のスケジュールが入ったカレンダーを作って、情報や活動を共有することでお互いの信頼関係を深め、地域づくりにすれば子どもたちの成長や発達につながっている。

- 委員 今の話はすばらしいが、やはり世代間交代が課題であると思う。地域の方たちで知恵を出し合っているというのは確かにいいが、担い手がなかなか確保できないという悩みを抱えていて、ボランティアでできる層が減っていく懸念がある。また、1960年代に人づくり改革のような中で学校教育が推進された経緯から、学校の権威性が高められたようなことがあった。こうした洗礼を受けてこられた当事者の先生方と今の子どもたちだと生きてきた時代背景があまりにも違うために、ここでの世代間の融合もなかなか難しい面がある。

それは教育の課題であるが、教員に向けられる管理を厳しくしたりプレッシャーをかけられたりする状況の見直しが必要ではないだろうか。

- 議長 ほかに質問がなければ、二つ目の「検討課題について」に進めたい。

- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） 新型コロナウイルス感染症の影響を受ける事態となり、前回の会議の委員の意見を集約したところ、人々の暮らしや生活に大きな影響を与え、従来の教育活動全体が難しい状況を迎えているということが確認された。そこで、皆様方から提起されているキーワードの幾つかをピックアップし、今後の会議で意見を加えて、「ポスト・コロナ」で目指す社会教育のこれからの在り方、それに向けての皆様方の意見をまとめて体裁を整えることを想定して柱を立ててみた。

一つ目は「コロナ禍」で急展開した「オンライン」化の影響について。

社会教育の側から言えば、学校教育を家庭で学ぶような状況や、「ワークとライフ」を分けた考え方、いわば「生きがい」と「なりわい」の区分を分けていたところから、在宅ワークで生じた自宅の職場化など、若者が社会に出て働くときに、考え方やスタイルをどのようにしていくかが課題になってきている。それと「パブリックとプライバシー」とは、SNSで自らの行為をネタにして、社会の中へ参加していく手掛かりとして利用する状況がある一方で、情報を介して自分のことが人々の勝手な判断で違うように受け止められてしまい、個人の情報を読み取った側の勝手な判断でネットで広げた結果、あたかも本人とは違う人物がネットの中で生きているような状況になり、こういった曖昧さがある意味、課題を生む可能性もあるという指摘であった。

二つ目に、直接的に会うことや関わり合うことが厳しくなるような環境

の中にあっても、寄り添う感覚をどのように社会教育の中に取り込んでいけるのかということ。

三つ目に、自己実現の前に自分が社会参加していることや存在を認められる安心感が必要で、公共性の高い社会教育といえども、個人というものに立脚にした取組や情報は無視できず、社会教育の取組として帰属しない個人の社会参加をこれからどうやっていけるのかということであった。

以上のようなことを皆さんと詰めながらまとめとしていきたい。

- 議長 ありがとうございます。これについて意見はあるか。
- 委員 先ほどの東山田中学校の事例だが、みんなで作っているという感覚を多くの人に持たせたことがすごいと思う。自分が主体的に関わってつくと、帰属意識はすごく高まると思う。有能な人というのは、その人一人で切り回して周りが使われているという形が結構多い。そういう人が世代交代しないでいつまでもいるのが最悪な事例だ。
- 委員 私も今の話に重なるところがあり、とても重要な意見だと思う。加えて先ほどの社会教育主事の話聞き、様々な課題が出てきて分断が進んでしまう社会になったかもしれず、ヘイトスピーチやナショナリズムが活発化する中で、社会教育は重要でいかに地域をつくっていくか、今だからこそ試されるのだと思う。そのためには、バーチャルと対面の両方合わせてやるということ、ウェブ上で様々なコミュニティが作られて、どこに帰属しているか分からない個人が沢山生まれてくると思うし、コミュニティ自体の概念も変わってくるようなことが予想され、どう他者と関わっていくか。壮大な実験ではあるが、一つずつやるしかないと思う。
- 委員 これまでは企業や学校の中におしゃべりができ、情報共有もできていたのがそうなくなってしまった。それにより例えば鬱になってしまうこともあって、いかにつまらない話題を共有するかと仕掛けをつくり始めている。オンラインでの授業中、子どものつぶやきが流れてそのつぶやきは授業では取り上げないが、授業が終わってから、別の子どもたちがその子に直接連絡してやり取りをする。そういった次に繋がるネットワークができるといい。
- 副議長 オンラインだからできる教育を教員が工夫をして授業をしたところ、出席率もよく成果は上がっている。場所の制約がなく海外からの授業も実施して、現地のコロナ対策状況やそれぞれの専門の話をしていただいている。ネットワークによってグローバルな繋がりができ、今後も広がっていくだろう。企業などはリモート化が進み、社会の在り方や地域が微妙に変わる。それらは、いずれ教育に跳ね返ってくるだろうが、1年、2年してみないと、やっていることが本当によかったかどうか見極められない。
 いろんな反省が出てきて真に何が残るのか。私たちは未来志向で見極めなければいけない。
- 委員 そのとおりだと思うが、それでも”Face to Face”でなければならぬ現場として、医療や介護の現場、保育園や小学校がある。学校教育はオンライン授業ができるが、子ども同士で触れ合うことが必要だと感じる。これをやり遂げなくてはいけないということではなくて、みんなで話し合い、納得して不安や困ったことを解決していくために、何でもないこと、答えがないこと、無駄だと思われることをみんなが話すことで、そこから見えてくる課題がある。

- 委員 思うのは、子どもの視点が今回のコロナの中でもって、どこまで重視されていたのか。高校生が発信した学校の9月入学、9月開始というところについて議論はあったが、大人の表現でお金がかかる、大変だとかの言葉で消えてしまい、もう議論もされていない。子どもたちからすると切実な問題であって、2020年度の子どもたちはいろんな体験ができていない。できないのはしかたないで済ませてしまっているところがたくさんある。オンラインの授業も、できるときの本当の目的は何なのかがあまり議論されていないのではないかと。いろんな議論をして、すぐには解決できないかもしれないが5年先、10年先、20年先の社会のいろんな教育活動を考えたとき、議論のスタート地点に立っていないと、来年、再来年になったときに、「あのときは何だったの？」ということになってしまう。学校もそれにふり回されてしまっているが、子どもたちを視点に置いた取組を考えていきたい。
- 委員 久しぶりに地域と学校の協働の話に参加していて、改めてはたと気づいた。杉並区の小学校でも、地域と協働しようとしており、建設的な意見も出て学校の教育活動が変わっていている実感がある。でも、学校には、やはり権威的なところがあって、確かに先生たちは給料をもらっていて、地域の方との協働と言っても地域の方々は無償でやってくださっているから、土台が違っている。パートナーシップを築いていると言ってもそこにふり返りながら進めていくのが大事であり、楽しみながらできることだとも思ったが、そこに子どもの視点というのを不在のまま進めないようにしていきたい。
- 議長 皆さんありがとうございました。では、時間が来たので次回についての案内をお願いしたい。
- 社会教育推進担当係長（社会教育主事） 次回は、11月ぐらいに予定して、またオンラインで行う方向で日程調整をしたいと思います。
- 議長 他になければ本日は終えたいと思う。ありがとうございました。